

地域経済ウォッチング

いわき民報 2012年11月1日(木曜日)

芝居『泡』に重ねた復興の意義

小名浜を舞台に

—フクイチをめぐり短く消えたバブルとその後—

葛藤と希望、再起への人間模様

東日本国際大学経済情報学部教授

大槻 雅彦

学生時代の友人と小劇場の芝居を観に行く機会が増えた。7月、東京・下北沢で劇団東京フェスティバル第10回公演『泡』(脚本・演出:きたむらけんじ)を観た。前回の本欄で、同僚の田村教授が「よそ者、若者、ばか者」が地域活性化のキーパーソンと書かれている。それに勇気を得て、今年4月に当地に赴任したばかりでまだ半分よそ者の私だが、震災と原発事故に見舞われた人々の葛藤と再生への希望をめぐる物語を紹介したい。この芝居の舞台は、3.11後の一時期に賑わった小名浜のソーブランド。このミニバブル的現象は、昨年6月に始まり9月には東電関係者から夜間外出禁止令が出されるまで続いたという。(「政経東北」9月号)

3.11に強い衝撃を受けた放送作家のきたむら氏は、数回にわたって小名浜取材して実情に肉薄した。これはその上に想像力を駆使して、笑いと涙、そして希望と元気が出るように紡まれた物語である。ソーブランドには建替えが認められず、改修できなければ免許取消で廃業。改修するにも信用保証協会の保証が付かず、復興対象の低利融資は受けられない(前掲「政経東北」)。独力で立ち上がるしかない切羽詰まった状況が舞台の背景にある。

店で出会った原発作業員の野口(天宮良)と磐州丸船長の門馬(近江谷太郎)は30年前の同級生とわかり、その後しばしば店で出会う。そして半年後には本音がぶつかり合う。野口には、3.11前から原発で働いてきた者として事態收拾への使命感が、金で集められたヤツとは違うという自負がある。門馬には、東電の賠償金に依存した生活に馴れ、漁業を捨てる者が出ることへの不安がある。

野口「東電の金でソープ来てるんだから…結構な身分だよな」

門馬「おめえに何がわかる!? おれたちの何がわかる!？」

野口「わからねえよ! でも、お前らだって、オレらの気持ちわからねえだろ。この仕事始めて鳴ったこともねえ放射線バッチがピーピーピーピー鳴りっぱなしで、仕事になんねえからスイッチ切って…どんだけ食ってるかなんてテキトーなもんよ。それでも、もう50ミリ超えて…」

野口「でも、不思議なんだぞ…4月になったら、新年度ってことで、あと50ミリは食えるからって、またフクイチに戻って来いって、いわれてんだ」

同級生というのは有難い。対立は一瞬にして消え、一転して門馬は、フクイチに戻るという野口を止め、自分の船での漁へと誘う。野口は答えず、ソープ店長の円谷(朝倉伸二)が「よし、飲みにいぐべ。そこらで手打ちにすんべ」と話を引き取る。

一年後の3.11、磐州丸の若い乗組員根本(竹尾一真)と信金職員の早坂(滝寛式)は、復興のための会社を立ち上げ、看板ソープ嬢のミナ(小林美江)は息子とともに小名浜を去り、店の女将の安齋(川俣しのぶ)は寄り添うように店長を支え、歌舞伎町から来たマオ(高畑こと美)は小名浜で勝負する決意をする。それぞれが、復興へのあるいは新しい道を歩み始める。これは、再起と新生の物語である。

これは必ずしも小名浜のソープ店あるいはその業界の復興の物語ではない。個人の再

起と、その人が属する業界や団体、地域の復興とは、重なる部分もあるが別ものである。しかし、前者なしに後者の意義は何なのだろうか。元の地域に元いた人が元の場所に戻る事が叶わないとき、去る人は新しい場所で新生を目指し、新たに来る人が地域の復興の一翼を担うのではないか。それに応じて、地域の産業や自治のあり方も変わるはずである。

小名浜出身というある方はブログで、「ほんとに丁寧に、大切に、小名浜を描いていただ」いた、「あのソーブ街は、小名浜にとって大事な場所なんだ。誇りにしていい」と絶賛している。芝居の細部には、よそ者には気づかない小名浜の町のアイテムが散りばめられていたらしい。演者が巧みに操っている方言は、ブロガー氏によると正調の小名浜弁とのことだ。できることなら、地元での再演を望みたい。そして、地元の方の感想とご意見をお聴きしてみたい。

(本稿のために、主演の朝倉さんを通じて、きたむらさんから脚本の提供をいただいた。改めて深謝したい。)